

平成 21 年 6 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18730336

研究課題名（和文） 社会システム理論の精緻化とその応用可能性に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Elaboration of Social Systems Theory and its Applicability

研究代表者

赤堀 三郎（AKAHORI SABURO）

東京女子大学・文理学部・准教授

研究者番号：30408455

研究成果の概要：

ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンが主導した社会システム理論が、戦後に形成された一般システム理論に関する研究者集団の流れに連なる「社会学的システム理論」であろうとしていたことを明らかにした。また、この一般システム理論の研究者集団において何が問題とされていたかという出発点から、難解きわまるとされる社会システム理論を簡明に読み解く道を示した。そして、この「社会学的システム理論」の今後の展開可能性はルーマンが試みていた《社会の理論》（Theorie der Gesellschaft）の構築というプロジェクトの延長線上にあるということを示し、今後の理論社会学に一定の見通しを与えた。すなわち今後の展開可能性は、社会は外側から捉えられず内側からしか捉えられないということ、言い換えると「社会が社会自らを捉える」ということにかかわる多種多様な問題を、システム理論の道具立てを用いていかに解くことができるかという道筋の上にある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,500,000	150,000	1,650,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：

〔分科〕社会学

〔細目〕社会学（一般理論）

キーワード：ニクラス・ルーマン，社会システム理論，一般システム理論，自己言及，サイバネティクス，再帰性、パラドックス

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代社会に対する社会学の理論的アプローチを構想するにあたっては、ドイツの社

会学者ニクラス・ルーマンによる「社会システム理論」は、質・量ともに他を圧倒しており、格別の重要性をもっている。しかしそれ

と同時に、ルーマン関連文献は難解をもって知られていた。すなわち、文章の晦渋さに加え、システム理論由来とされる独特のジャーゴンの多用が、読者による理解を阻んできたのである。

(2)ルーマンは1998年に亡くなった。そして21世紀に入ってまもなく、彼の遺稿もほぼ世に出揃った。ルーマンの一連の業績は膨大な量にのぼるとは言え、それに関して評価を定める条件は整ってきつつあると言える。しかしそれでもなお、国内外の社会学の世界においては「社会システム理論は難解」という評価は相変わらずであり、敬して遠ざけられる傾向が続いていた。また、社会システム理論研究の内部においても、ルーマンの企図を彼の死後どのように発展させていくかという方向性の研究に関しては手つかずのままであった。

2. 研究の目的

(1)ルーマンが試みていたような「システム理論によって社会学理論を基礎づける」こと、そしてしかる後に「システム理論によって《社会の理論》を構想する」ということ、こういった研究プロジェクトはどのような意味であったのか、また何のためであったのかといったことを解明する。

(2)ルーマンの構想は今後も維持できるのかどうか、より限定して言うと、ルーマンが盛んに用いていたシステム理論由来とされるさまざまな言葉、たとえば「オートポイエーシス」「自己言及」「構造的カップリング」「固有値」といったタームが、さらに突き詰めて言うと「システム」という言葉そのものが、社会学の(一般)理論を打ち立てようとする関心に照らして、本当に必要であるかどうか(あるいは他でもありうるのかどうか)を論じる。

(3)ルーマン亡き後、彼の構想を引き継ぎ、社会システム理論を展開させていくには何をどうすることが必要で、そのためにはどういった材料が必要となるかといったことを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)ルーマン自らが依拠しているシステム理論(彼自身の言葉では「自己言及システムの理論」)の文献や研究会記録にあたって内容を検討し、また、「システム理論」の成立の歴史的背景を明らかにすることで、ルーマンが社会学にとって「システム理論」が必要だと考えた理由を浮き彫りにする。

(2)ルーマン最晩年の大著 *Die Gesellschaft der Gesellschaft* (1997年)を精読し、そこで述べられているルーマンの研究プロジェクト《社会の理論》を、「システム理論」に関する知識社会的考察と照合させることで、よりわかりやすいルーマン解釈と、ルーマン理論からの展開可能性の提示を試みる。

4. 研究成果

(1)一般システム理論におけるフィード・バック概念の新たな展開やそれと関連する概念群が、社会システム理論においても重要な位置を占めており、またこれらのシステム理論的概念によって、社会学の主要なテーマ、あるいは理論枠組そのもの(「再帰性」など)を再解釈することができるだろうという見通しに基づき、英国の社会学者アンソニー・ギデンズの学説を捉えなおした。ギデンズによって唱導された「第三の道」の議論は、彼の言う「制度的再帰性」の概念に基づいているが、この「制度的再帰性」をルーマン流の社会システム理論と結びつけることで、近代社会システムの自己制御というギデンズのビジョンをより理論的に深化させた(論文)。

(2)社会学の一部門である社会システム理論は一般システム理論の成果を一方的に受け入れているだけと思われるが、一般システム理論が「一般」という言葉を用いていることからすれば、それとは逆に社会学からシステム理論一般へと貢献する社会学的システム理論というものもありうるはずである。その可能性をパラドックス概念の検討から示唆することによって、今後の社会システム理論の「精緻化」の方向性を示した(学会発表)。

(3)戦後まもなく形成された一般システム理論の研究者集団から社会学者たちが排除されたのは、社会学の対象がシステム理論になじまなかったせいではなく、当時の集団内の相互作用（人間関係）および、戦後アメリカの政治的状況といった偶然的要因によるところが大きいということを明らかにした。またこのことから、システム理論が社会学と結びつくこと、あるいは社会学的なシステム理論を構想することは十分可能であることを示唆した（学会発表、論文）。

(4)ルーマンにおいては、一般システム理論の社会学への適用可能性という意味でのひとつが、「社会」についての理論構築である。ルーマンが、システム理論に基づいて近代社会をシステムとして再解釈し、これをもって社会学的な「社会の理論」の構築を試みていたことを示し、ここから、「いかにして社会を記述しうるか」という問いの形式を手がかりとすることで、ルーマン《社会の理論》のエッセンスとその意義の平明な説明を提示した（論文）。

(5)ルーマンにおけるシステム理論由来の語彙の多用の理由の一つを解明し、ルーマンの到達点についての評価を行った。すなわちルーマンは、「社会の中でしか社会を観察できない」ということ（言い換えると「社会は外側から観察できない」ということ）から生じる論理学上の困難、すなわちパラドックスの問題を解くために、ハインツ・フォン・フェルスターやゴットハルト・ギュンターといったシステム理論研究者集団のメンバーたちの所説を参照したのだということ、また、方法論においては前述の観察とパラドックスの問題に答えを出したが認識論においては答えを出せず、ある程度の方向性を示すのみにとどまったといったことを示した（学会発表）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

赤堀三郎，「戦後アメリカにおけるサイバネティクスと社会学」、『経済と社会』

37号（東京女子大学社会学会），pp.19-34，2009，査読無。

赤堀三郎，「社会の社会学的再記述」、『経済と社会』36号（東京女子大学社会学会），pp.19-35，2008，査読無。
（<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007175961>）

赤堀三郎，「『第三の道』へのシステム理論的アプローチ」、『社会・経済システム』28号（社会・経済システム学会），pp.79-84，2007，査読有。
（<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006961100>）

〔学会発表〕（計4件）

赤堀三郎，「社会システム理論における観察とパラドックスの問題」，日本社会学史学会第48回大会（於・鹿児島国際大学），2008年6月28日。

赤堀三郎，「戦後アメリカにおけるサイバネティクスと社会学」，日本社会学会第80回大会（於・関東学院大学），2007年11月18日。

赤堀三郎，「社会学から一般システム理論へ」，社会・経済システム学会第26回大会（於・東京工業大学），2007年10月14日。

赤堀三郎，「『第三の道』と社会システム理論」，社会・経済システム学会第25回大会（於・神戸大学），2006年10月15日。

〔図書〕（計0件）

該当なし

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

該当なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

赤堀 三郎 (AKAHORI SABURO)
東京女子大学・文理学部・准教授
研究者番号：30408455

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし